

頭と顔の表現

——『日本舞踊』の場合——

目 代 清

○前 言

1. 身体の運動・動作にかかわる一次芸術の科学的研究は、他に比して遅れていると言われている。まさしくその通りだろう。

ましてや、一般的に言うところの狭義の「日本舞踊」にかぎらず、日本の全ての伝統的舞踊舞台舞踊において、現代の科学的立場からの動作・表現に関わる「振」の調査・分析は、一部に個人的に進行中だが、その成果は未だしの状況にあるとみて誤りでなかろう。

が、日本の各伝統舞踊の特定の分野にかぎれば、それぞれの「振」の整理に関しては、比較的古くから、主に当事者である職人達により独自の实用的方法で行われてきている部分がある。ただ、それらの作業は、あくまでも作品個々の「振」の記憶・伝承を主目的とするもので、必要に迫られての作業であった。そして、さらに一步をすすめて、発展した「基本技法」の洗い出しの成果も皆無とは言えない。しかし、それ以上には深く科学的に究明した一つの学問領域にまで発展をみないのが現実である。

こうした状況をつくりだしている理由の一つには、日本の舞踊が身体の運動・動作による感情表現に偏らず、むしろ情緒・情感などの精神面を重視する傾向が強いからであり、それが運動生理学上の科学的・統計学的な調査・分析の参入を否定的・拒否しているからに他なるまい。

2. また後向、仮にそうした面での科学的な研究が大がかりなプロジェクトで着手されたとしても、その結果・成果が、現実に実践されている舞踊に益するものとして還元されることを前提としなければ、研究自体の着手・遂行の意義は希薄のように思われる。学問のための学問、科学のための科学に終始することは、一つの学問・科学のあり方としての意義を認めるにしても、どうであろうか。そうした問題が残されているにしても芸術としての日本の伝統的舞踊の動作・表現の研究には、まだ、それ以前になすべき調査・分析が多く横たわっているように思われる。また、以下に課題に入るにしても、問題は舞踊が頭部のみで行われるものではなく、身体全体の表現の一部であるから、それが如何に他の各部位と連動・関連するかが最重要となるだろう。これら身体の各部位の検討が

終了の時は、改めて全体的な身体表現のありようが検討されることを期待したい。

よって以下は、そうした事前の理解の上での一連の研究を、学者者に促す動機作りの作業と考える次第である。

3. 一般的日常生活上での「頭と顔の表現」という概念ではなく、「舞踊」という枠のなかでの『頭と顔の表現』の場合でも、舞踊には鑑賞用とそうでない場合がある。が、ここでは『日本舞踊』という条件なのだから、鑑賞用に意図的に振付けられている舞踊における「頭と顔の動作」の意として、まず理解しておきたい。

そもそも舞踊運動・動作に「頭と顔の動作」を意図的（身体運動に伴う自然の頭の動きとは別）に加える目的には、動作全体の単調を回避し、より積極的な舞踊動作の複雑・変化を狙って、観客に舞踊としての身体運動の美を享受・誘発・促進するために行う場合と、さらに別に、一定の意味・内容を観客に伝達・強調するために行う場合との大別二通りがある。ということは、前者は厳密には「頭と顔の動作」と称し得る。が、後者は「頭と顔の表現」と区別して呼称されるべきだろう。

さらにまた、日本では「頭」を「あたま・かしら」と呼称するのは、日常的用語であり一般的であり、それには相応に使用上の便利が認められる。しかし、概念は漠然としており、範疇が曖昧と思われる。したがって、これを「頭部」と呼称し、同様に「顔」は「顔面」の方がより科学的で、「舞踊の動作・表現」を科学する立場からは望ましいと思われる。以下はそうした解釈に従う。

○「頭部・顔面」の「生理上の分類と働き」

- (1) 通称『頭（頭全体）』は「頭部+顔面部」の二つの部分に分類される。そして約三分の二が「頭（あたま）」・残りが「顔（かお）」である。
- (2) 「頭」は「脳の収納庫」であり「頭蓋骨」で保護し、さらに、その表面全体を「頭髪」で覆うことで頭部全体を熱・衝撃・摩擦などから保護している。
- (3) 「顔面」を除く「頭部」には、随意筋の前頭筋と不随意筋は後頭筋は後頭筋とがある。ただし、「頭」全体の動きは「僧帽筋・肩甲挙筋」など「首部」の筋肉・神経の働きによるものであり、頭自体に運動する機能はない。
- (4) 『頭部』全体を支えるのは「頸椎」と、それ

を取り巻く筋肉などであり、『頭部』は「胴部（肩）」の上部に約15°前傾して連結している。この前傾が複雑なモビール運動を可能にしている。

(5) 「顔面部」には「眉・目・鼻・口・耳・髭」などの重要な感覚機能を備えた諸器官が集中している。動物のなかでも特に哺乳動物にとって顔面部が最重要な部分とされるのは、これらの諸器官が集中しているからであり、表情はそれらの動作に負うところが多いとされている。

(6) 「顔」の各部分には「額・眉間・こめかみ・頬・頬・唇・顎・おとがい」などの称があり、これらの運動は独自の神経と筋肉とでまかなわれている。（耳の〈随意筋〉は退化）

○『頭部の動作』

※「頭部」には基本的に運動機能は備わっていないのだから、『頭部の動作』と言う表現は不可解であるが、舞踊として「動き」を与える作業＝振り付けることで「首」の運動機能を意図的に働かせることにより「動作」は生じる。

（日本民族独自の伝統的「美感覚」を前提に洗練・誇張した動作）

※『頭部の動作』はA「頭」とB「顔面」とにわけられるが、『頭部全体』の動きは「首」の「働き」による。

（日本舞踊では「頭の動作」として、「頭を振る」ことを伝統的に「首を振る」と呼称している）

A「頭の動作」は3種8通り

1. 頭を「前・後・左・右」へ倒す。

（かっこ内は伝統的用語。ただし流派によって異称がある）

イ. 前＝下向き（うつむく）

ロ. 後＝上向き（あおのく）

ハ. 左＝左傾斜（かみ倒し）

ニ. 右＝右傾斜（しも倒し）

2. 頭を「回転」させる。

ホ. 左回転＝下廻し（しも廻し）

ヘ. 右回転＝上廻し（かみ廻し）

3. 頭を「前後・左右」に振る。

ト. 左右振り＝（いやいや）

チ. 前後振り＝（うなづく）

※頭髪を踊らせる（獅子の毛・バラシ髪の毛）

動作に「菖蒲打ち」「髪洗い」「巴振り」「煽り」などがある。

※上掲各動作の複合とした「三ツ頭」「五ツ頭」などもある。

※後頭部に仮面を装着（うしろ面）しての特殊な動作がある。

B「顔面の動作」は2種12通り

1. 顔面全体の動作

イ. 「三ツ振り」（順・逆）

ロ. 「八字振り」（縦・横）

ハ. 「面（顔）残し」

ニ. 「化粧面（顔）」

ホ. 「鳥追い」

ヘ. 「返し面（顔）」

ト. 「面切り」

※戯曲の設定に従う「老若男女・貴賤上下」の役・状況によりバリエーション、また「大小強弱」は無限。（人間に備わる喜怒哀楽の顔面の表情を洗練・誇張）

※仮面（全面・半面などの別あり）を使用する場合「照らす・曇らせる」など、特殊な技法がある。

2. 顔面各部（眼球・眉毛・鼻・口＝舌を含む）の動作

チ. 「眼球」⇒「寄せ目」「流し目」「横目」「正眼・上目・下目」

リ. 「眉毛」⇒「眉間の収縮」「眉の上下」

ヌ. 「口腔」⇒「左右引き」「舌出し」「噛む」「くわえる」「発声」

ル. 「鼻孔」⇒「小鼻の拡大・収縮」

ヲ. その他「頬・頬・唇」などの使用

※「髭」もあり得るが、現実には髭を付けずに、手と顔面の動作とで髭がある様を形容する。その代表的な形容に、「奴の髭すり＝鼻の下と鬢へかけて生やしている自慢の髭を左右に撫で上げる」「三番叟の翁が老人長寿の象徴として生やしている髭を扇の天の部分で擦る」「一般的に老人が顎に生えている髭を手で鷲掴みにしてしごく」などがある。

○あとがき

以上、伝統的『日本舞踊』における「頭と顔の表現」の立場から、まず、第一の作業として、極めて即物的に「頭部と顔面」の動作を洗い出してみた。が、ここまでの段階における整理では、格別に『日本舞踊』に限定されたものでもなく、他の多くの舞踊と同等と言えるだろう。また、これら動作が行われたとしても、すぐに「舞踊表現」には繋がらないだろう。単に日常の動作をあますところなく駆使している舞踊であると理解できるに過ぎないのである。

身体運動である舞踊の「表現」には、「表情＝感情表現」の側面と、単に「遊び」の運動としての側面とがあり、双方が混用されるものである。また、加えて「リズム・拍子・間」との関連が重要となってくるから、そうした観点からの分析・整理が当然ながら重要となるはずのものである。

*1996年度秋季第42回舞踊学会
『舞踊學』第20号より転載